



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	【コラム】記録とそれを活かした研修会の在り方（III 保育記録を活用する）( fulltext )
Author(s)	岩立,京子
Citation	研究紀要 / 東京学芸大学附属幼稚園, 24/25: 74-74
Issue Date	2013-12-07
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/148362">http://hdl.handle.net/2309/148362</a>
Publisher	東京学芸大学附属幼稚園
Rights	

記録は、瞬時のうちに消え去ってしまう経験を可視化し、過去から現在をつなぎ、未来を指向していく手法である。保育記録を書くことにより自らの保育を振り返ったり、可視化された記録をもとに話し合ったりすることを通して、他者の多様な視点や解釈に触れることができる。また、幼児の経験や幼児にとってのその意味を捉えることなどを通して、保育者個人の専門性や園全体の保育の質を高めていくこともできる。

東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎では、「今日から明日へつながる保育」をテーマに、協同性をキーワードにした中・長期の指導計画の在り方や、子どもの経験を捉えることから環境構成を考える記録の在り方をサブテーマとして研究をしてきた。小金井園舎の先生方は以前から、日々の保育を振り返り、記録を書いたり、長い見通しで保育を構想し、実践する過程で、長期にわたり、継続して記録を取り続けることもあるだろう。しかし、そのような記録を誰もがすぐに書けるわけではないし、記録のなかには、保育者の見取りや解釈、それに対する保育の手立て等が散りばめられてはいるが、じっくり読み込まないと、どこをどう理解すればよいのか分からないこともある。園全体で保育の質を向上させるために、園内外のメンバーにとって分かりやすく、共有しやすい方法で、しかも、元の記録の意味を失わない活用法を考える必要がある。このような問題意識のもと、記録とそれを活かした研修会の在り方を考えてきた。

この研究が提案した記録の活用法は、担任保育者が書いた前日の記録→それをもとにした遊びや関係性の予測→保育の構想と実践→子どもの経験の捉え（A：幼児の経験している内容、B：幼児に必要なと思われる経験、C：具体的な援助としての環境の構成）を示し、参会者が議論するというものである。当日だけでなく、前日までの幼児の経験から当日をつなぐことで、保育者のより長い見通しでの幼児の経験の理解や、これから必要と思われる体験を推論し、それをもとにした環境構成の過程を参会者が理解でき、議論に参加できる点である。当日の幼児の実態から保育の目当てや手立ての妥当性について振り返る園内研究会が多い中で、新人もベテランも、園内の教員も園外の教員も同じ土俵に立って、長い見通しで幼児や保育を理解でき、議論できる研究会は、そう多くはないだろう。

記録を他者に開示することは自らの視点や解釈を覗かれるようで躊躇してしまうものである。しかし、幼児の経験から次に必要な経験を捉え、環境構成するという保育の本質的な課題に立ち向かうためには、小金井園舎が提案したような幼児の体験を前日の姿から連続的に捉え、次に必要な体験から環境構成を考えていく保育者の思考プロセスが分かるような記録を提示が必要である。保育者の視点と他者の多様な視点とを併せて、議論し、幼児理解を深めていく必要がある。小金井園舎の提案した記録と、それを活かして多様な視点から議論する研修会は保育の質を高めるための一つのモデルとなるだろう。